# 鬼貫句選

全

文
145

へ 5
707

門 號 707 巻
東京牛込區大久保餘丁町百拾番地 坪内雄藏
明治三十六年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈
大久保歡里藏書之印

道のほとりにそて小路ありけり里ちかき
ゆくやうれより見しく彼方より嶺つゝ
峻く見ゆるをたどりふたつにあるきおもむきに
ありく道のうき橋足さへうすきむね
ちからなしとかゝる世をすてはじれはや
なつかしといふむへ見ある人なりて忠
玉に金に付にきこえある句をとらへとそ

人のこゝろにおもねや推をもとむ事し甚
さしめく見きてにうけ侍るか漸えらり
にこと侍り七車といふ家の集ハ世り
おのゝ意ねハよし所やあいをろ生処も
はうえてあまねく思つゝの花ふる徽
自ら筆を尽し学ひもせハわか芭蕉翁に
この翁を東西に左右し延宝より享保に
いたる其乃道の盛世をてらし見てけふ



其の花に中く人のこゝろの花のさかひに
足りんの月の影ときてよひの声
大かたりんかし志か思ふところ自笑か
言にまうをこれに序してあたふる事に
あかり

明和五年春二月不夜庵太祇

坪内雄藏藏

# 鬼貫句選巻之一

不夜菴太祇考訂

## 春之部

大旦むかし吹にし松乃風

ほんのりと不のやえ日たまふりけり

老松町

家宿のまちは来よりも早足餅

中垣や梅にしらける去年の空

五器の香やまらり子の餅搗嫌

何たもす八十八乃款捨て

雪よくさの中忘れし年乃花
試筆人麿共像ふむかひて
旋頭句
烏帽子の影ふのくと
何の花そとし共花
六日八日市よ七日乃まつな哉
芽柳の枝ふ鳥まし、空けふや
風ゟ吹梅の流ふみハまつゝのこと
袖雲詠

鶯ゝの梅の小枝り糞をしく
山里や井戸乃ちゝちる梅の花
梅散てきさよりのちハ天王寺
花紹ふ鼻毛も抜ぬ梅乃花
鶯や梅よとまるハむゝのしかし
うくひすの鳴けハ何やらなつかしう
新の鶯　窓の鶯　薗共鶯
枝共鶯　谷乃鶯
うくひすハ山ふとときゝえ多那里

旅行

あつさにも多川や淵水乃青露
青のゑところしにえたる沖
くち晴て障子を白し青日影
曙や青の葉末乃青露
ちりし奥や月まて白奥月ハ更奥
日南も尻のきれぬ猫乃妻

空道和尚いの形ろの是なんちう
眺眼とされし小即答

庭よりも白く咲ける桂の那
ゑへく許りける桂うな

夕暮の塚にて

この塚ハ柳なくてをはいきたり
惜ハおふろ鳥のねさめ哉
ゆかしさのあてしきや雉子の声
草まくや雲雀のあゆむ日の下かる

二月二日京を従ところ
もとめて

小へおきハ東へ出きハ花共ちるへの
誰ゝの家の揚油むすふ春の草
骸骨をもて那山をきち
いつる名残り
名よりちや笠ぬくほの春共ふ
春の日や庭に雀の砂あひく
ひともり舟寝て伏見を
くる夜
おほろく灯見ゆるや淀乃橋

月なくて昼ハ霞むや昆陽の池
正多ふて
山吹ハ咲いって蛙まう乃底
備子お
起さしき共日和もよしや十五日
何まよふびゝんの入日人多ゝり
人乃親の鳥追ひけり雀乃子
人子追け人に馴るや花の子
をと里の麦や菜種や軽ゝのきみ

ゐられや喚ふる子隠る
状見きハ江戸を降りり春北風

里家春日
猫乃目のまる昼る女春日の那
あし春の柳の糸やゑの乃流
樹乃巾手只ハ春柳の尾長鳥

住吉まて
みとり立花しの姫松めてさよ
月尋のつまにわられし悼

春北夜の枕嗅やし月ヶ朧しよ
二月七日へ惟我ことかれて
のち餞子
いなふとの花のおもかけや忘られぬ
春ごとの姿袖さる孫聲ゟ
名と遠き口をふとけに袖さくる

伊丹伏浅
鵜の女や伏あしびの水乃汁
かし井戸へ飛そこなひし蛙のね

一泓や朧よの世すゝれ草
春風や三保の松原清見寺

四日暁

浪の底子我足形の肴やらん
永き日を拾ひ暮らす大津る
一の洲へ乾のあと馬刀とり小
桃の木へ雀吐出す鬼瓦
新うらに去年の蚊うごく桃の花
杖つける人も立寄り梨子乃花

黄檗山まで

ありのみ乃ありとハ梨子の花の香に

三月十日は我翁懐旧
支考萬句興行す

かけまくも爰を焼香の風の音
それハ又花も見さへ流るゝ北吉
冨士ハ雪も花一枝のよし乃山
んあての花てもし聖て餘をハ松
恥しの老子等の法く花見んハ

何くれと浮世をぬすむ花乃陰
煩悩あれハ病生あり
骸骨のうへを粧て花見かな
桜狩の花尓狼ぬ　菴かな
花見に何うりきて　はうはく

鐵卯懐旧
うるてやな桜をみれハ咲ちり
花乃以扇さハ多り法職人
兵部太輔光成のもとより

文の中尓桜の花を入て
送られし返し
九重の状より花乃こゝろ見有
去年も咲ことしも咲や桜の木
さくら咲見る足二本馬四本
見よかし牛も野尓寝て山さくら
谷水や石も哥よむ　山さ九ら
此句長伯老人より
誹諧家伝受の時此吟

あるよし人やたち一家
恵谷にて
盛なる花にも絶ぬ　念佛かな
師才のむすひせまほしく
いはれし人に
花のない木うよる人そ多くなかりね
大心禅師六十賀
順ふやさきなきつ花を耳乃奥
うつ後子や陽乃花年陰乃花

又ともまさ花にちりきてうつりく
定家々の袋巾に抱とめ
たましひとなんきこへし
観世音のたえせぬ中に
比寺に行て
花そなり散ハや袋を抱く観世
花散て又志賀のなかり園城寺
多田院花見
武士をみんなそのり散さて花の風

咲ゝに見るゝ尓花のちるかゝり

散花

又ひとつ花そつき出く今のな

鶯よ花ハちるとも飛まハさ

那田村そ蜆あへ喜り蔵の頭

孝行

同吉横尓自異ハ堅志り喜の花

よちへて喜も末志やよ又ねる礼

京よ侘こそなのて古ゝを

たちれなる喜のすへなれ

むかふてかいてなる

喜母の降るもおもふ おもハれふ

泳せ晦の母を

喜母乃ふたりよて降ふけり

雑

淀川そすゝしさや多車

神淋ふ旅森して

小荻文て川喜高きまくら哉

雪の夜も又おもし後や水乃筆

塩尻ハ不二のやうなるものなれん

池田唐船渕

むかし北海中比の渕今ハ田まう
畴まくらをなして茂となる歟

女の飲楽の語をおもふて

棹のおとハ松の声のみ澂つてみ

葭ふ力て人ヲハえくに白鳳

松風や四十ゑてもさハのしい

東山院御葬禮を拝みまゐて

御車ハ雪の月夜のなごり哉

# 鬼貫句選巻之二

不夜菴太祇考訂

## 夏之部

春くてる穂雛波より江にのりてぬるみの淀のほりを見けるに

淀舟や夏の今来る山かつら

春とみるとみさへ行に更衣

一日ては花に久しき袷かな

忘れるゝよのゝ昼の袷ゝのひ

ありて西方なるよ筑紫なる
を室ふまかせつかはしふとて
う月三日かのなるふ行て
我ハまさ浮世をぬかてころもかへ
恋のなくさも嬉しや衣かへ
花惜しむけも無心の柴車
きゝのぬやうふ人さいよなかり時鳥
おなし雲井のほとときす
母ときれ耳すり拂よ峠かな

雲枕花の辛さむるほとときす
津乃国の玉川ちるひかとときに
傘乃もとにふ
は夏ハいく度きかんなときを
ゑ乃稲縄手を通りて
雲千鳴や氷田の底のほとときす
江戸ふて
あちらむく君もおいへ郭公
なましいふゆく秋むかしの時鳥

題呉猛

蚊をよけて親の躰や　時鳥

枕の後灯白し　ほときす

奈良にて

神くと云日蔵了てはちら山

非情ても涼き枇杷の若茶哉

みよしの川上よ業平乃

隠れたまひしにとてあり

けるに人の発句せよと望み

けれハ彼男のむかし杜若

の例にならひてむかしみ紀と

いふ字を沓かふりにをきて

むかしと云六帖塔までの紫末のな

卯月廿七日西吟へ行て

菜なりとも為吟桜　姫をまろ尓

おもしく酒るさに

いふの日をさおそ五月雨におもひ出ん

橘存てたのく發句せ進　時

雨そふる森てたち花の起てもぞ
旅行の里
のり魚や揚ふろゝ堀乃内
んなりてまゐるもおのし茶引草
はくくとおもふ
乘むかし踏つかしさる蝸牛哉
我か身の細うなりさや牡丹畑
ほふ飽蚊子もなくさ覚えし居所
猫伝ふつまにおくれし悼

在もさそふ際やすひと八仙了と
海音侍來共よろこひ小発句
とまて
老をちつん車手苑ふさる
卯月廿七日道字とい子医師
乃新宅ふてふ句ちられしを
けふはあやめ昔らん　木　月　古
端午
葺余や本乃粽の國律風

京しらぬ女の粽ふ形なり
人丹振袖ふて
壁一重雨を厭ひてつ花あやめ
螢見や松に蚊帳つる昆陽乃池
萩垣や卒都婆乃あいを飛ほたる
聖のすへやかゝき畑をいつる月
さつき雨ゐふるゝのと覚へ声なり
五月雨にさゝなみの渡る二王の声
さゝされや餅のおもしをたのむくしり

西吟点行
侘ぬきとも虫ハ落ぬ唐式
竹のこや雪隠にて崖崇の坊
やきをきに杜もる細く咲にけり

鵜飼
鵜とゝとりにて後を身をとゝ里行
根を草の水に花置く池のうへ
大坂へ行て東行点切に
草の花乃身に徳のせて根をひらへ

夕暮ハ鮎の後見る川瀬かな

　ゝや川町尓あそびて

飛鮎の底に雲ゆく流かな

蜘の巣ハあつきことのなり夜木立

　鶯の声なくなりせハ月白が

　といへるを今ちらしハ

鶯や音を入て只へ青い色

　休斗彩宅

夏ハ菜尓家をとり川よる家居か

探題蝉

鳴蝉のその木にとまり居つらぬ歟

鳴せハし鳥とかゝるせミ乃声

かくれや竹尓蝉なく相國寺

　己丈にゑかしめせて

夏草の梢も紫をとちへまさなかと

　京よりいそみへ行

水葉月や風にふかれてふる里へ

さハくと蓮うこかく池乃亀

小町の像のたてる家にて

すゞ風やあちらむきたるみだれ髪

夏の日乃うらんで水の底にさへ

松雨興行

すてし子よ河原に足の届けるまで

田家

六月や臼を日にそふつき臼哉

知牛老母死を悼

水無月の汗を謝るほとけ哉

雲の峯たんに嵐乃崩しても

夕立のまたやいつくに下袴そらん

夕立や隣まではふいて風ふいて

夏草に身を留められて旅の空

夕涼

なんとけふの暑さはと石の塵を吹

旅行

夏の日をすとこと淵田の水の色

獅子谷

涼風や虚空にみちて松の聲

旅行

あの山もけふのあつさの行衛哉

礼の涼

日盛を花とみさらし明日も来ん

夏乃罩の声たえのしも蓋ゝる

　　水光月の比舎羅の

　　判断しけるを

國ゝを秋になつさう見ふまへ迄



冬ハ又夏の手し志やと いろ〳〵
出る言葉を清りねて
夏の手し志やと思ひなる
句なる所冬季ならぬ所なり
夏季にてなしと聞こえるハ
冬ハ又夏の手し志やと
思ひなりと
作りの入られたるの
字まで夏季留し
よみにくき言の葉ひとつハ
そのまゝし

志らぬ人と謡問答すみ哉

冬も又夏の返しまやといひより

雜

志ら浪くと岸を流るゝ大井川

須三ノ尓比あつまかゝけやし衣

　　山濤ふて

木神せし油志免木の薫たり

鬼貫句選巻之三

不夜菴太祇考訂

秋之部

初秋

なんと秋乃来たともみえ次ん、すゞ

我よりもせいて秋きく川ごゑいの

ひく〳〵と木の葉うごきて秋ぞたつ

しん略起て秋きく川風乃音

けさ秋を待て寐ぬ我や起さぞや

初秋雨

初秋のこゝろをよめる　北斎

あられけもすゝしはめく秋の風
わも秋東ふへを秋乃暑さ哉

桐の葉を落てもした下ふ廣まれて

下ツ舟にて

稲佐アや淀のよ三太ゝの水車
人乃釈乃くるとはしらやものまつて

こて詠にて影みむゝ子や玉はつり

古ほこり佐けてもらめし萩の寄

庭の萩

内芽に月とのこゝぬ如く萩乃寄

高井立志餞別

人むゝまて笑子わゝれて三子
かくと百三十里とくするを百卅里

おもちへふゝのハこちりへ吹ハ秋乃風

家を汐ゆきしと半橋のは
とわせおふハ彩の松風流水
まひらしてちをひやゝの爪後

行き野径乃虫出しも野分
に吹送りてかれのれしくの数
かすかなり今宵霽なれも
やゝて月のさやかにはしきのく
覚えて

霽かわ乃松の木さへも秋の風

むかしハ堂嶋の新地家建
ならひ舟きおち堀江の川あし
に承はりの流をつきて入日を

惜む帰帆ハ座上にみえにし
て姿さへ見ぬ旅人乃けしきを
おもふにハ夕ハさらにものかなし
須磨の秋乃風ハあてゝ執帆遠の

野径ニ遊子

秋風乃吹つけて人ハ此辺
稲よりの里を通りて
ぬむ足や澪をふに草の露
青さいつも秋にしつ声をむしの数

鬼貫ハ七夕乃夕
なまく八巻

行秋の捨どころなきむしのこゑ
聲なれや風に吹くる虫のこゑ

獨聞虫

人呼に應ふも夜ぞ更つむしの声
大小ハ武庫達誘のつきをとく
催へて左ハ伊豹うつきハ芽を
ろのふ高し来れる人もなけれハ
物切む雲もなくうち晴て致
景さとく色的歴なり

見せるなり霧のなかハ宮に消も哉
　宥囲はむ世をあはれにおほへて
古垛や荻く訪なるきりぎりす
おもしろさ意にハ尽ぬ露ろ那
霧の玉ぬく川楊ぎる露ぞや
花しくと取みさしさるすきのちな
吹のゝふ露乃霧はさいほ赦しよ
此露窓より吹や秋乃風
也のんさよ雨の後乃女郎花

今さむらの秋もなくて

伏見にも町屋乃うしろに鳴鶉

伊丹あさこ火

あさこ火に稲つま光るとひや返ぶ

芭蕉にもおもハせぶりのうこん哉

思ひ余りて恋る名を打碪の那

朝寒のけふの日なたや鳥の数

東山の老母の死を悼て送る句

おもひやる只の秋さへくらされぬ

老母のまかりける夜

去年の秋にいつ迄とて釈尓去て

冨士の形を画るにいさゝらか

違ることなしされとも筆を常

光る雲の今見しにたやらハり

其けしきもいかにくおれしの

らにして彩なる冨士を見る

事暫時にいくたひかわらなし

高山ハおのれひとり立ちハ

並ひたちのくに外山の風子
名あるハ何事と古今景色
のかはりぬ世てあるき
にようかりと秋乃空なら冨士廿山
夕くれ不まし
馬をもけと今秋の冨士見る秋詠哉
こし声とはふりもあはて雁の声
下ゝの子の行方見もくむしゝ鳥
むゝのしゝのゑ究もあはれよ秋乃空

来山ゝの妻乃追悼
萩の葉そよくや空へさよ交る
砧ねやふさし入月ゝのけつれて
行るかゝ子人の妻共棺前の書
うけしあの秋とハ秋とハ今其嘆
諧てハ花をやふかり始まれして
まもくれなし
雪の花や月秋うらめし寝なきよしろ
老母をいさなひて

風もなき秋のひうんの綿帽子

旅泊

衣か川京へハ走つ森覚えの形
犬つきて稲みにおきハ宿の丘

家せなくておかこの旅道の
さへ並不なくそこくに桝
なとつせて昼のこ海までハ
陋しやうくほこりなき枕
て安庭よ

吹風や稲の香まて懐足袋

待宵

あきみちて明日のける月よりもなほ
秋ハこの月夜鳥をいつと鳴く

名月十九句

月よけれ去年乃今を花咲
除しも我影さへや窓乃月
月をとて漸く雲乃ちぎれぐ
形にもあらぬ昼からそそ首北ゆるくこそ

木も草も世界皆花月の句

連歌

くもるとハ心しれぬ月の今宵哉

病後

志みじみと立て見にけりけふ乃月

荻水の病後

名月や雨戸を明てまんてん哉

文切や花ハ紙にも押もの哉

此秋を孫に子のなく月見哉

愚痴くと独に見る月見ゑハ

明ちハの俤寝る　窓乃月

月ハ此今宵に明て何ひとつ

父の身まかりける年乃

名月

虫と鳴月も父まかり忌の中

名月くもりしハ

またりは謝月とを詠めるに

言荻大雨

人魂とハ日本ふかやなり

志よふくに降なる月をくとを
十五夜ふりけさハ今宵哉
何乃木と見て夜ふふ今宵哉
さこ交る夜のあてとも夜の月
燈火やおのきゝのふなる夜共月
歌人ハ居なから入宵哉
秋共月人の玉まで光てけり
冨士の山ほちいさくもなき月しかな
見ぬきれと月の為にハ氷乃濱

中秋十七日女の身まかり
ける哉
かくれけき安の月もきゝの哉
述懐
頭とてハ空のかしまし須ハ六の月
月代やむうのを起き被共浦
振の木乃すんと立寄る月夜哉
摂女の絵に讃す
その方をおもふてかるき園の月

袖の浦といふ盃に
うけたや汲ミの月乃袖ふかく

後名月

名月や後の雲を山の端に
後の月まめなとふくを
豆を喰て豆の花とも詠もや

後名月

けふハ梢の松風もくれぬさ
紀より東山の峯をまつき

ことに実非情さへところも程
以されて十五夜の空もそ
宵の空に晴て月ゆくらか
後の月夜の降時けふ乃月
十五夜も夜なりける十三
夜もふかりけきハ

又の月

又の月をあふのいてこ枝甲斐なハなれ
貞享元の秋長月十七日
お萩又行まて小庭のけし

芳人ハまうす

今乃んどこそ秋の秋乃月

おなし夜ねるきみかとふ

きくのしこをめぐりて

いとゞ鳴猫の竈にねむるかな

破芭蕉やふれぬ時をもとを哉

宗因墓

宗因ハ去死なれしり秋乃塚

久のふや無の夜るのうそ北葉

重陽

菊の香のひとつをのこし白ひ哉

翁尼は貞月次祉舎

よもぎし草乃翁哉　寄拂

旅泊病

なかね夜を病来ひ称て旅よ哉

落穂拾ひ鶉の糞ハ枝ふけて

古寺や葉をいきさる様の下

まろくひ子菊の糸ハ京の九町

文臺記

みむろ山の嵐ハ立田川乃
錦におちあふ山の紅葉ハ
今江原氏鶏賀の家に
なかれよりて世にしゝち名を
照れ寸法を

高サ　三寸壱歩
竪　壱尺八歩
横　壱尺九寸

裏に八

別所山満願寺蔦悟寺住
之村興昌寄進之
と朱を以てかしらより府後ハ
むかしの秋底に句ひて夕に
月をおもひ影に奥山の鼓
をきゝふ実月日ことしちに
流きてちしぬ袂さへ脈に沉
み居をしきしくをおもふり

いくちよの人乃んに庭とも
あけんそと知らぬ云に紫の
淑さくすし深に意しくこ世
傍きしよりし宝、永ひのよ
秀の秋に菜の花むさに宮
のもとに筆を置ぬ

寄謡祝常

むかしの底に見へて花、に紫
目をさかせ後さしぬ世乃に紫精

あし葦麦ひとり芽生の子を臼にして
草の紫の岩にとまとあ子を母草よら歌
木にを似す桜をもちいさき桜の実せ
去祝をうちひしき出る刈、田、のな

賀

云に紫の落穂拾ふをさのみら那
九月丞

雑

むかしやし今やしらぬ秋のくさ

来いといふ時にはこいてさふいお以

意

君とさす盃をとらをけ鬼ふへ

哭ふ逢意

油さしあふらさしけり宗牧哉

まずい句だ

# 鬼貫句選巻之四

不夜菴太祇考訂

## 冬之部

あさゝの冬の日なさき乃寒さ哉

夕陽や流石に寒し小六月

大坂へ出て

はぬさいふつけてもさうし京の山

福島住居のとし

冬とまき松の木枯てむらてなか

はるもしとよのさしやる火焼哉

さゝ栗の葉手かゝる小麦哉
ちんと栗のちゝくさ芽枯て冬に
ねすこやあられも諸や後るゝ花

世の中をすてよしと旅させて
あとらくひろふ坊主とも哉

古寺に凌むく櫻桐の實げや

左卿
寝ちすむ新手をつる夕立の雨
麦蒔や妹の湯をまつ頬かむり

葉ハ散て始る雀の木の枝に

宇治にて
冬枯や平等院乃庭の面
枯芦や難波入江のさゝら波

久しく交りける友の身
まかりけるときこへ侍りしかれハ
いとゝさく旅の心覚ハ物うきを
木からしの音も似たる萩のおもひ哉
ひうくと風もさむく冬牡丹

茶の花や十もとよう似る紅日山

旨人の白ひハれハし　枇杷乃花

川越て赤き足かゝ　枯柳

寺守や鶴の羽せる峯の松

白拍子の尼になりてえしく
すみける庵に立よりて

引のへて白い毛もならはえ花

荒るとのとゑハさふとし　神送

時雨ても常みしのし　天王寺

おとなしき時雨をきくや高野山

野もの花薄紫さくなきけれ
冥をくゝもて不夜城に入は
花あかて姿ゝきゝのゝ文ハ妓
しなまて白ひはり声ハこける
とり子たくひなして己あま杉
妓しの雨むらしを拝待ちて
交に手ワきをせむ

系にハ鼓のこほろて　去くれの形

祢られぬやふかくしるも鳴千鳥
千鳥鳴須磨の明石の舟にやりせ
汲汲や千鳥のこして汲る海士
家鴨のとおまへ人なし沖の鴨

筑後三毛領にて

遠干潟沖ハあれ沿鴨乃数
鳧鳥のおもさえて浮にけり

おまへ花のひより其うち

凋み時鳥の声きく夜毎を

淋き園さみなふやあきれん
茂かる秋葉のこ游なつを
都にわきてこゝろ秋を
まろぬ方の何をれさとえや
時うつる一生ぞ変りて月
こよひも十に満る夜あはれに
鐵卵立て来れ是何ぞと我まさ
是何そ空ゝ寂ゝ変又変それ
の市に叙しミにひかれて

きのふをハおもハさかし
をとおもふとおもきし又何子
老しや

いつもえるものとハ遠き冬乃月

宵月の雲ふかれもを寒さら那

旅泊

孫うら涼めさい木ら共寝覚哉

夜話

灯火のこ葉を咲すむさき哉

待宵の水巾や耳とあけてたる

紙子若てえぬ鹿古のほときす

銭お

盤谷ハ、のさちアて覚なて

衛のひて冬の屯く儔やよいはふか

山家燕

もつうしや楷ふふすほる煙草類

初雪ふ友をまかされはのしける

我宿の雪のもして積えふこされ

白妙のころの字やら、雪乃、字
雪ハ論外薪ヲ狸おりをへて
十二月二日初雪
この雪ハ降ふくと師走まで
冨士の雪我性の忠の者なるハ
寒苦
雪の降歟摘　さハあつき炭団哉
雪て冨士気冨士ヲて雪ら如しの雪
老ぎらる人の中むつまし



今ハ実事もなくてさのしめる
花ぞ示行て
雪ヲ笑ひ居ふもこゝふむの哉
おさなき子におくれし人の
もとへ悼てやつかしける
ちるとのミ雪ハうき世乃花はな
飯後の雪を
飯くふて其ハ後雪乃降ふけ了
○嫁く心く行飯のやうなるものハなし

冬よりと氷の月きうろみにけり
井のもとの草葉におもき氷柱哉
何かへ手長みしかなる氷柱哉
朝日のけさすや氷乃ゑ車
寐て冷て空也きことて覚ハせぬ
殊勝也牛乃糞ふむ鉢たゝき
日きのふて家毅なる鉢扣
鉢扣古うとなりに空也よ了
節季ハや臼こゝの末てゐるのぬける

世の花や餅の盛ての人ハ彭

歳暮

惜めとも寐ても起ても暮てある
月花を見の人さてや年の峠より
花雪やそれをそしてそれを詩
詩を暦に書まつ老のあさか
灯の花に書ま川唐の飛
欄や髪乃扇に年ちく日
惜しなねの(?)のつみとなる年を

君を月をまち夜ゐさしまゐらせつ枕
寐よきねよ髪のすく儘の年をまち
流れての底さへ白ふ年の秋哉

雑

獨居の僧の庵に行て
燃る火に灰うちきせて念仏哉
人来りて念じとうろい物をなし

# 思貫句選巻之五

不夜菴太祇考訂

大久保歎里藏書之印

禁足之旅記

小窓は月さへ遠山の端入りおもむき
南面乃秋日ハ影をめくるさへやし
我さて治あうハめてゝ浅宗居なるめれ
ゆゝいやしけきハさのしうおもひつゝし
かく枯寒しき秋乃かく吾妻れゝ
ゐにさびしけれと用なきみ身を遠
く遊ふるも暫老秋乃ためにおも

[illegible]

幸さハ古しへよりしるよしもなく
居なから再廻のまれこそおよはし日く
ころもを脱すてむかしハ我形ひ
ともさり不孝子もあらすとおもひ立ぬ
廿日の夕くれ大坂に出て伏見一の
船にのりての記

乗り出て秋風寒し釈ふより
ほのくらき後難波乃地をたれはて
も草茶の家ハたゝ太おもしくさけと

船ひく男らの岸つたひゆくハ中
のよくてえも指あれなる八し江口
み里ちまる宵雪の夢来なく川風
も今た旅人乃枕に引てむかしみ秋
をちらひ記なるをすさ哀は夢也
幽冥の出とこ很ハ行すと江原
ちをきる月ハ依田の家に出て森
井ともしひ影うすく以と神くし
枚方牧方葛葉のさしにぬくきと

川沿やくらみ下を多く起て暑もむす
涼さる夜すゞみく

ひやくと月も白しや秋の風

曙ちらたこ夜淀のとまりをゆくむし
桂川つゝみ立のかれと名車北すゝ
とハ尺あるかとなり

桂北中ま何のやうスあるる名車

廿一日ふしみふつく船問けり打ちらめ舒
小町ハ示く家北隣自ふなりてさひし

伏見人庵秦かゝをたちのけり
我きより深草よ手むく

かれ尾姿

草ゝも道なふして風ともむうしみ
小ほびもなく今ハ聖人の車のみ従来
牛ル亭車も蔭寸草北家

元政旧菴

さのゆ内日蓮宗なれと彼の
佛の教もなくへきゆく釈迦のみ

たふとくおもはさ

前乃ない釈迦に涼しや秋の色

里はなれておゐひとかつれさむく乃か
けるかなし殊勝に覚へてあゆみさりけ
むかし紀基乃鐘つきたるにあひてよみ
すひけるおもひ出されハかの法師紀
基に一句ありとて発句さて

しほ鐘といつまても動く初紫紺

おきて寒の鳴神にまいる

琵琶乃音を有北嵐のかをり

案内すら子をやとひて三井寺より高
観音にのけれにく井寺念比寺秋を
湖水の月なと舌さへまりけすいひしと実
馴きハおもとれしき物をもおもしくて
大津の子お月桜とハいたぬらお
松本たちてしろこ川にゐる人の家の
うし後に棟の末あるて

義仲塚

椋茸や木曾ゝの精進がらしにて
すゝ猪にをりはなれて秋北田の面乃
わのきたる中平

兼平塚

兼平か塚渺くとありて田か那
あの不より乃を太刀のほりて
石山のいし乃形もや秋北月
もとり尓芭蕉かのほりみちて
我尓啥を椎の木もなり夏木立

[illegible]

もたしをこうて
瀬田川秋よこ類きしかくみやま
廿二日草津を出て翁のかれる翁句
きおもふに付尓志なくありて句乃
すらさハのしれやうたるところなたれし
うけハとのゝ巾をめくりてん形しきハ
なし世乃為の俗言ともつて作さハ今
誹諧ふりてあらも赤の古きをのるへ
しと我あはりかね友尓遊子けせ地もし

あんをハやまひ例の病ひおこりんハ誹諧
をのりかけして肴をころへあらハ給す
以しにして誹諧もなくやすらひをなき
大安楽界にいくらむ

樂しと蛙の屋根ふくや今年菜

此発句ニて伊丹風
獨吟の仙あり

石道水口ハさの獨吟にまじれて発句
もなくけふ土山にのり寐す
廿三日起日よりさ起みせて

吹たふけ櫛を買ふる秋の風

白川橋といふをこわて京すしとおも
ひと越向もなくて蟻の坂ゆなる枕
かゝるにとていきこゝの石塔にりほと
こ井松風ハ昔に字ありぬりてし
ほま白の石井にいれや秋のかね
近江井くふをとられて路廉の峠つる
渚ハまの西より湖水をみれとけふハ雾
ぬのみしてあやなし

狂哥

思ひか鈴鹿乃山にきられハや
高にくもりてん、ぬ湖
行かいて坂をくるまき田村堂にのほ
りて瓦乃ま加つく
六文の月をもしきれ田村堂
道をきつうるに聖山の色ハ彩色で
ちるとうつりかゝるたましひける世の中に
るハ我らきのをなきれとおもひしく

鈴鹿川を渡る
一もとに餘をさひけり鈴鹿川
誹界来てぬいさとて行彼もつらきを
駿ハ津のくふりを起てちハ今宵の
若にほとかに遊子聖ハ美に花しと
してかれのあまゝ数巾をみれハ（哥仙誹界發句あて誹諧畧之）
四日市とよふにまかて今日ハ菜
師よていひゝる句去つく
國富やいやをしのおに御初尾

廿四日桑名にいりて風はげしくて船にハ
さはるとて夜あけを待ける所
なり磯よりちいさき船子のかりにお
ほつかなくあやまりて蛤など焼きて
浦のひまて
風のなに鱸乃膾させてけり
午比さゞなみ風なとりて舟にのりて
積て拏とくおもしろかりし物を申の
うち雅より西みなりてかいめす鵆見

のおはる浦熱田にいたりてよび
とやとりの西
熱田にて鱸乃膾咄てけり
廿五日なるその名をききて行きさ
尾張三河のさかひ橋なりおはりと
のうち半ハ板をうちし三河の地を
つちとしなり
発句合
尾張

板かけてさきはみえするや草の露
此継橋ばかりのかはよりも土をわ
さゝはかくまてなるあるはし板よ
りつちに行かゝりて草は橋にさへ
うつれぬと秋乃あはれさえ
せなんを除し

三河

板わたる人にみえするや草の露
此句三河の人か尾張のさかひ板
渡せるをみて橋を土になしたかし
いへる意味た太同しきなれとも竺
また三河の地にかゝりて河あれま
けくふの勝さるへし

池鯉鮒をよるとてやまたまつく藪せさる
ふら此長者のあしなくいひて田此中そ
みかやうひさるる士の足によせへて
言むほとに耳ちゝきゝせ乃一ぬしをとかて
上陽璃よかり田乃畨八掬る斗

わのさく後の為をおもひすとて旅に
見る幸にこの人もしへつて托をしく古吟
して赤坂に宿と執爰のさうかまて
語ありてより例の独寝は（哥仙燈外発句之 俳諧略之）
廿六日はとなくて御油の宿にかく執
打行たたれの大きなる松の一株
まて楷ひとつまなりて日乃記さくを
残ぬかとなん
為ひの日ハとまくにやある秋の京

より田の町にて聞きて
うまし鳴吉田通きハ二階かし
ひらち坂とりと京子休て
寄為に屋ねとかおお後す茶の木に
ぬさ川を過行辺も三河遠江乃境
子川橋なりおそれを渡りて
我据ゑて三はの家とおしけり
白須賀さくて荒井につく濱名乃
橋のあとたくのりをて

ことしまて濵名の橋を出 秋挙

まさ夜のんきなりて

なの月やむかし濵名の橋の月

舟よりお坂になりてさよひは濵松の橋を

二十七日天龍を渡る

浦上流の浦ノ村まで川舟橋になる

ぬと船にのかゝりてけに宗府の

子を迎へてなつのしくなりさす、

我祖父と舟橋わたらむ秋乃水

池田北宿に遊女ら石塔なりも母乃

ちゝのたくやちらんとおもむし女もかく

なりれにみも歌よし世を記して

秋乃萎老母と遊やも我もする

伏井を出て行乃の田乃ほとりに

絡おとす人あつされた伊丹の馬

櫻の花句に

田の中に梅の一本立てるは

絡をおとすの千のまゝの

うくおもしきるをおもひ出て見きも
我の気にあつまる

田此市尓雪隠一ツ立まちる事
箕ハを伏きたる様ニ登るより
占此奥尓掛川をさして此尓越をより八日坂
尓定ぬ

廿八日

佐夜中山

松杉のすけたる立ちる中尓わたり
氣ちかなくさし入て於ん侭あし

けふとも尓秋三日あてて佐夜の山

菊川

兼久三年此秋中納言宗行卿と
申し人つくあかて東へくたされけるに此
宿尓とまりけるか昔ハ南陽縣の菊下流
を汲てよはひを延今ハ東海道の菊川此
西の岸尓宿して命を失ふとある家の
障子尓かきつけけると云を聞まれハ
いたまれ尓て我の家を尋ぬる尓火の為

めにやけて人云の宗も跡ぬると古物の立名
るあとなしおもひいて我も家の様子を
家行ハ兼久三年の秋述懐を書我
ハ元禄三年の秋其七魂を弔ぬ
本来の様子ハやあじ秋乃風
大井川
名遠く名をかしてまかり
やまてし
痩すみ乎淵澄し大井川

素説

ぱさ素秋子とかれてすめこれやとの袖
秋まて有
羊可仙素秋、名なり
俳諧器之
廿九日佐の遠川を行とて
本後の秋露まふさ下紙子哉
道くるさて後ぬさ川にわらきて半ん
名こらの句名やあへして秋月なしの歌
季のかきりなるらの东むきひて八つ
きも我の季手ひうてなしひきられハ
秋露まふ紙子全秋なりしとりふかする

まへの句かなしび哉此ちとみていはする
此のは語尓奈集なることもゆふつれてハ
四季乃哀をりなる露月なれハ句株う
ちゞめたる所秋なしされハ一と勢乃
長月ハ夜やけすぬるのゝきりもれて
其のなをとる尓五日妻此秋此形見ハ
秋霧立みる張子尓さ残哉残りと
涼しと秋もしらひてなりすゞし露
見尓して味ハさゝの気味なし

句ハ見ききより作りすると夜尓
格てぬんをとるやすらをとるやと
いへハこゝろを格此秋なかし物をとん
まさひとつ手ちまりて前中ま加てる夜
きゝ竹尓て物作る家ゐまさなり
虫籠を買て据所尓向ひ乃り
油庇を置て清見ゐる尓のける
庭上秋涼しくして佛閣静尓宿し游
京見やる所手ちかめハきく所のひき

ふまくなれて

秋の日や信ふ浮ぶ三穂の浦
奥は北浦の海士乃鮑とらなど説
ハなを初とし又粘ふし波乃い於
浜るひふ道すがら哉なとて汁ふ不の名も
とおもふけふきたてなつかしくて

雑

あつや枝ちて涼は我舩出ふれ
由井かん原をまえて富士川ふつき

ときさへ余儀乃水ふさかて船乃さる
事甚をやし

不二川や月ゐるふしさふ秋の空

よし原と外て晦日の船

秋北日や富士乃子霽北船翻
うきしまの原をひさし合通って

浮しまや岡ふ重ろつは　馬の後

三しまの社を拝みまつるにそれ労
拾ひしむとおかふ斗乃松杉ゐな

色立ちもなくてさひしさる神風に楢
乃しつく浪も遠しき砂ハ我の白
むすゝるほひ清池ハ水の面すみ立
て底おほつかなくすこし

雑

ちはやぬる若れなへなる神組
のふるくて松ね枝のとゝけそいさふ
けふ三浦乃宮ふいさときなる雲ハなる
あなれとさはよひハやさし其まへに枕す



十月朔日家を出て切俗ふきの山
まて花人そあつさる側おろしといひ
なしハはふともそ

雑

水海や我郭そあふ第松山
碓をるそさい乃川原にて念佛まる
法師の家にくふきまえ往来の人
せ小石あやまつゑのきよいるをとみる
ふと子をもつそ散しら手て、との

はまれなり
　お地蔵のしきも我に鳴や残鶯
梅院りすいそとて
　神乃盛りも当主とおもへハ神ぞ盛りと
かし北本ハ皆人るうぢのくさて我のはら
岩根道いくやうりとはのそとて中
く能麻の坂ハこの行も似す衛
小田原にくる
雑

　氣辛労やるにの旅とのゝ小田原へ
実ちて旅たちり行道たれハ旅るゝすも
なきにと後悔してすゝる我の里を
さへハ海道よき十町たちり左の山
陰なりとりそ
　さむるにいとゝおもふやる我の里
我さきより大磯りさくて
　とゝ涛お　今きはめさし石の肌
若沢にとまりて二日の飯旅の涛堂に

まいる者経乃声ふとく我も世
念乃念佛す
十月の二日も我をなかりけて
之道けふハ彼岸にしてきこりぬといひ
きよりをすさしとして　哥仙之道発句あり
誹諧畧之
かれ川を過て夏ふを冨士乃人穴と
いふ所あり口廣くあいて行く乃深
さ闇くてみえす
人穴に打ぬし寒し風北音

品川より鉄炮洲乃御堂をみやりて
世さしのハ堂よりもさ冬の月
江戸ふ入て日本橋を渡る
いつもなき雪ハ降けり冨士の山
嵐雪ふ行て旨を告て秋ハ新界ふれ
庵ふ来て夜長くおもしれ書ハ伴自の日
彩して我ハいふみしのく心帰てい
ぬふ長し名のひふよりて夜もすから友
吟ハ句ハ其ハ俳小むの子
哥仙嵐雪発句あり
誹諧畧之

盧生の栄花ハ一睡五十年のゆめ
嗟ゝ哩ゝ歓楽者旅心十三日乃
うたゝ紹も鬼貫の名ある居士と
まるを倩跋もみつのゝや

元禄三年庚午十月日

# 鬼貫句選跋

五子乃風韻を全うするものにハ
ともに俳諧の流への達す
あたに五子とゝ子ものゝ其角嵐雪
素堂来山鬼貫也其角嵐雪
おのゝ其集あり素堂もて
もとん唐句多く来山ハわつかにほとのゝら
句多くさし諸家の選にもるゝ

おもて侍らぬを死とは鬼貫してまで
太祇にして世に傳ふる句まれなし
不夜菴太祇としころの事を
嘆きてもしほ草かくのしこにかつ
集めて天数百句を拾得たり
まことに滄海に網して魚を
もとむるがごとしなほもるゝ
ものあらばくれ侍らん さは風を

鬼貫が句選と題してまづ
世の好士につぐ世例の気みし
かなる出板をもとめし八文字屋自笑也
于時明和己丑春正月
三菓軒蕪村書

京寺町二条下
橘治板